

《論文》

# 『日本広東学習新語書』の「人称詞・方位詞」について

矢放 昭文

## はじめに

『日本広東学習新語書』（以下『新語書』と略称する）のカナ音注（語音）、字体、訓読状況など、本資料がもつ基本的な特徴について、これまでその一端を報告してきたが、その基本的な性格についてまだ十分な調査と検討が出来ているわけではない。この事情に鑑み、小稿では「人称詞」「方位詞」を中心として、その語学的特徴について報告することを目的としたい。

## 1. 人称代名詞について

『新語書』全篇を通じて、各語・文に2種類の語音が片仮名により記録されている。一方（大半は右側）は話者の方言音と推断出来る字音注記であり、もう一方（大方は左側）は話者の読書音と推断可能である。例えば冒頭部収録の「我」について「ガイ」「ゴー」（第一葉）、「我我」について「ガイガイ」「ゴーゴー」などがその例である。

「第一章 代名詞類」には「眾人、大家、各個、攏（攏）統」など人数、人のまとまり方の形態についての呼称が記録されているが、ここで、いわゆる人称詞についてその概略をまとめると下記の如くなる<sup>(1)</sup>。（紙面の汚れもあり、文字表記に疑念の残る部分もあるが、大筋で誤読はないと判断している。）

標準中国語	『新語書』		『新語書』注日本語
我 wǒ	我 ガイ	ゴー	ワタシ。私ノ
你 nǐ	爾 ニー		アナタ。オマエ
他、她、它 tā		伊 キー	アノヒト。アレ 彼人。彼
我们 wǒmen	我我 ガイガイ	ゴーゴー	ワレワレ / 阮 ハ キヨン 私共ワタクシドモ
你们 nimen	你(等)ニーニー		アナタガタ○オマエニ
他们 tāmen		伊們 ( )	彼人等 彼等 アノヒトタチ ○アレラ
谁 shéi/shuí	甚么人 マカイギン		誰ダレ ○ 誰タレ

すでに矢放2019で報告済みであるが、「我 ガイ」に対応する方言音として代詞一人称の音節に /-i/ 韻尾を持つ音形は、『漢語方言詞彙 / 第二版』<sup>(2)</sup> (p. 548-9) にもとづけば梅縣、福州の二カ所のみである。

標準中国語	『漢語方言詞彙 / 第二版』			
	梅縣:	厦門	潮州	福州
我 wǒ	侬 : ŋai↓	我 : gua↓	我 : ua↓	我 ŋuai↓
你 nǐ	ŋ↓	你 : li↓	你 : lu↓	汝 ny↓
他她它 tā	佢 : ki↓	伊 : i ɿ	伊 : i ɿ	伊 : i ɿ
我们 wǒmen	偈登人 ŋai↓tenʰ n̄in↓	阮 : gun↓	阮 : uŋ↓, ŋ↓	我各人 ŋuai↓kouʔk nøyŋ↓
你们 nimen	ŋ↓ tenʰ n̄in↓	恁 : lin↓	恁 : niŋ↓	汝各人 ny↓ kouʔk nøyŋ↓
他们 tāmen	佢登人 ki↓ tenʰ n̄in↓	個 in↓	伊人 i↓ nan↓, iŋ↓	伊各人 i↓ kouʔk nøyŋ↓
谁 shéi/shuí	瞞人 man↓ n̄in↓	啥人 s̄iãʰ laŋ↓	[哋] 佗 ti↓ tian↓	底人 : tieʰ nøyŋ↓

『漢語方言詞彙 / 第二版』によれば、特に梅縣の ŋai↓ が「我 ガイ」に最も近い。福州音 ŋuai↓ も /-i/ 韻尾をもつが、/-u-/ 円唇音介音は『新語書』の音

注にそぐわない。

一方、二人称「爾 ニー」については梅県、厦門、潮州三箇所の語音に近いとは言えない。厦門、潮州は何れも l- 音声母が報告されており、直接の参考には値しない。但し、/n-/ 母と /l-/ 母の混淆状態（つまり同一音素として認識している状態）は粵語方言地域でも広く観察されており、この点については別途に報告したい。温州 ni<sup>l</sup>、建甌 ni<sup>l</sup> の二音は参考に値する。

三人称「伊 キー」については、用字は異なるものの、梅県「佢 ki」の音形が該当する。

他の客家語の人称詞についての報告、例えば李作南1965：〈广东东北部五华县华诚客家话〉<sup>(3)</sup>では単数形については；

第一人称	ŋai <sup>2</sup> (僱)
第二人称	ni <sup>2</sup> (你)
第三人称	ki <sup>2</sup> (佢)

と記されており、調値はことなるものの、『新語書』の仮名音注に重なる部分が多い。

遠藤雅裕2016<sup>(4)</sup>「代詞・不定の表現」（代詞、不定詞、p.396）の報告に基づけば、一人称（単数）については；

我：ŋai<sup>55</sup>

你：ni<sup>55</sup>

佢：ki<sup>55</sup>

と記されている。また複数形（p.398-399）については；

我□（儕） ŋai<sup>55</sup> teu<sup>53</sup> (sa<sup>55</sup>)

我{個/□} ŋai<sup>55</sup>{kai<sup>21</sup>/e<sup>21</sup>}

你{個/□} ni<sup>55</sup>{kai<sup>21</sup>/e<sup>21</sup>}

佢{個/□} ki<sup>55</sup>{kai<sup>21</sup>/e<sup>21</sup>}

などの音型が、調値については不詳であるにも関わらず、『新語書』人称詞の音形に重なる。

## 2. 方位詞について

『新語書』には、方位を示す指示詞、および指示機能をもつ判別詞（量詞）を伴う語形として下記の記録を認めることができる。

さらに、指示詞機能を持つ判別詞（量詞）を伴う指示詞の語形（這個、那個、我的）については、粵語など南方方言によく見られる現象であるが、『新語書』も記録しており、その音系特色の考察に有効であると思われる。

標準中国語		『新語書』		『新語書』注日本語
這 zhè	這	リー	ツー / チュー	コレ
那 nà	那	其*キー	彼 ピー	ソレ、アレ
哪 nǎ	哪	ナイ、ナー	ホー（何*）	ドレ、ドノ（何）
這個 zhège	這	リーカイ		
那個 nàge	那	キーカイ	彼個 / ピーカイ	
哪個 nǎge	哪	ナイ、ナー	ホー	

今日の標準中国語（普通話）では近称詞、遠称詞、位置不定詞を「這」「那」「哪」三文字で区別する。『新語書』では近称詞に「這 リー」と「ツー / チュー」、遠称詞に「其\*キー」と「彼 ピー」、位置不定詞に「那ナイ、ナー」「ホー（何\*）」、とそれぞれについて二種類の語音を記録している。インフォーマント担当者の無音識の口語音と修得していた文言音を示す記録として貴重な価値をもつものと思われる。

『新語書』成立時の1900年前後、は民国革命にも至らず、国語統一運動も始まっていなかった。したがって、文言・白話による用字の規範制定にも至らない時期の記録であるが、逆に、インフォーマント担当者の時期の漢字による白話文体表記の一端を記録するものとして見逃すことは出来ない。

該当語彙の『漢語方言詞匯 / 第二版』にもとづく関連方言の音価は下記に示す通りである；

標準中国語	『漢語方言詞匯 / 第二版』		
	梅縣：	廈門	潮州
這個	佢：ŋai <sup>1</sup>	gua <sup>1</sup>	
那個	ŋ <sup>1</sup>	你：li <sup>1</sup>	你：lu <sup>1</sup>
我的	佢個 ŋai <sup>1</sup> ke <sup>1</sup> , ŋa <sup>1</sup> ke <sup>1</sup> ,	我□ gua <sup>1</sup> e <sup>1</sup>	我個：ua <sup>1</sup> kai <sup>1</sup>

また遠藤雅裕2016によれば：

這個 lia<sup>55</sup> kai<sup>21</sup>、那個 kai<sup>55</sup> kai<sup>21</sup>、誰 ma<sup>33</sup> sa<sup>55</sup>、什麼 mak<sup>32</sup> kai<sup>21</sup>  
場所を示す語形としては：

這裏 lia<sup>55</sup> (vui<sup>33</sup>)、那裏 kai<sup>55</sup> (vui<sup>33</sup>)

などの語系を報告している。いずれも『新語書』収録の方位詞の仮名音注の基礎となった方言を推定する重要な証左として採用することが可能である。

### 3. 方言字の用法から見た『新語書』話者の語学基礎について

『新語書』は一人称に「我：ガイ」を充てるものの、二人称には「爾：ニー」「伊：キー」を充てているだけでなく一人称複数形として「阮：キヨン」をも記録している。

成立時期から判断するに、口頭言語を書面語として記録する方式が定まっていないうちの状況を示すものであろう。「伊」字は歴史的に視ても三人称を表記するものとされてきた。その伝統は、潮州を舞台として演じられてきた伝統劇本の『重刊荔鏡記』（嘉靖45（1566）年刊、天理図書館蔵）にすでに見えることがよく知られている。『新語書』の声調を除く語音形は「\*ki」であるが、今日の客家方言報告などでは「佢」または「渠」などが使用例であるとして知られている。

また今日の厦門方言で使用される「阮：キヨン」が収録されている点も、『新語書』話者の語学背景を探求する点で重要なポイントと考えられるが、この点については、更に掘り下げて検討したい。

## 小結

『新語書』の語学背景については、「人称代名詞」「方位詞」の概ねの特色から判断するに、今日用語で言う客家方言と重なる部分が多い。

但し、客家方言という用語が学術的に取り上げられる契機となった羅香林の『客家研究導論』が刊行されたのは1933年のことである。羅著以前に筆録された該当資料である『新語書』が語学的に、特に語音面、用字面でよく整理されていたとは考えない方が妥当ではないだろうか。

五四期以降に始まった「国語統一運動」に至る十数年前に成立した『新語書』が語る仮名音注語形に、話者（インフォーマント）にとっての白話音と文言音が混淆するのはむしろ無理のないところである。今日の閩語、廈門話、潮州語などの語音、方言字などの要素が混入していても不思議ではない。

## 註

- (1) 以下『新語書』のデータはExcel版に基づく。全巻のデータ入力は青山小百合氏（当時は京都産業大学外国語学部2年生）により完成されているが、未刊である。
- (2) 『漢語方言詞匯・第二版』1995.6刊, 北京大学中国語文学系編、語文出版社。
- (3) 李作南1965〈客家方言的代詞〉《中国語文》第3期, pp. 224-231, 205頁。
- (4) 遠藤雅裕著『台湾海陸客家語彙集』中央大学出版部2016.6刊。

[付記]：小稿はJSPS科研費（課題番号17K02753）による研究成果の一部である。